様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１日現在

機関番号：３２７０４
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２０５８１
研究課題名（和文）　入唐僧慧萼の求法活動に関する基礎的研究

研究課題名（英文）　A basic study of the Japanese Monk, Egaku in Tang Dynasty

研究代表者
田中　史生（TANAKA　FUMIO）
関東学院大学・経済学部・教授
研究者番号：５０３０８３１８

研究成果の概要（和文）：９世紀に日唐を頻繁に往来し、日中の宗教・文化史に多大な影響を与えた日本僧慧萼について、日中に分散して伝わる関連史料を収集し、これに注釈を付した史料集を作成した。また、中国現地踏査と収集した資料に基づき、慧萼の入唐活動の全体像を復元する研究論文を作成した。さらにこうした成果を収録した報告書『入唐僧恵蕚の求法活動に関する基礎的研究』を刊行し、関係機関・研究者に配布し、広く共有できる東アジア史の貴重な研究素材を活用しやすい形で提供した。

研究成果の概要（英文）：Egaku is a Japanese famous monk who was active in Japan and China in the 9th century. He had a big influence on a cultural history of Japan and China. We have researched and collected a lot of historical materials about Egaku, and have created historical documentation of Egaku and research papers on him. We will hereby widely share a valuable research material of East Asian history.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：日本古代史
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：慧蕚、東アジア史、日本古代史、交流史、入唐僧、在唐新羅人、唐商人

１．研究開始当初の背景

(1) ９世紀に日唐を頻繁に往来し、日中の文化史に影響を与えた日本僧慧蕚の関連史料は、性格の異なる断片史料が日中に分散して伝わっており、その統合的把握は困難である。

(2) 慧蕚は同時代においては他に例をみない頻度で日唐を往来し、様々な活動を行っているゆえに、日本だけでなく、中国・韓国でも関心が高い。しかし慧蕚関連研究は、各国それぞれの各研究分野の問題関心に沿って蓄積されており、これらの成果が相互に活用されていない。

２．研究の目的

９世紀の日唐交流で活躍した日本僧慧萼について、注釈を付した関連史料集と関連文献目録を作成し、加えて慧萼の足取りの全体像を明らかにする研究論文を作成することで、内外で高い関心が示されながら、各国・各分野からの部分的・分散的研究に終始する慧萼研究の現状を克服し、広く共有できる東アジア史の貴重な研究素材を活用しやすい形で提供する。

３．研究の方法

(1) 日中にまたがり分散する慧萼関連史料を収集・整理し、これに注釈を付した史料集を作成する。海外の史料については、研究代表者が海外共同研究者とともにこれを収集する。

(2) 慧萼の唐における活動地を特定し、また中国の慧萼関連史料・論文を収集するために、海外共同研究者とともに中国において調査を行う。

(3) 国内外で収集した慧萼関連研究論文の目録を作成する。

(4) 上記(1)～(3)の調査・研究を踏まえて、研究代表者は慧萼の入唐活動の全体像を復元する研究論文を作成する。また、海外共同研究者も関連論文を作成する。

(5) 上記(1)～(4)の成果が国内外で広く活用されるよう、注釈付き史料集、文献目録、研究論文を収録した報告書を作成し、内外の研究者・研究機関に配布する。

４．研究成果

(1) 慧萼に関する史料集としては、これまで、1922 年の橋本信吉氏による「慧萼和尚年譜」が広く活用されてきた。本研究では、橋本氏の収載した史料の 2 倍を超える計 77 条を日中の史料から収集できた。また、これに注釈を付した史料集を作成した。

(2) 収集した史料は、できる限り諸写本で文字を確認した。その過程で、以下の諸点が確認できた。

①慧蕚の名の表記については、「慧」を「恵」とする史料や、「蕚」を「鍔」や「諤」とする史料などがある。このうち、慧萼の時代に使われていたことが最も確実なものは「恵蕚」である。しかし、その他の表記も、慧萼の時代に用いられていた可能性が否定できない。

②これまで広く流布してきた『白氏文集』の慧萼跋文の釈文には、一部修正すべきものがある。

③最近公表された石山寺所蔵「大師文章」の写真版などにより、慧萼と関連する『高野雑筆集』下巻所収「唐人書簡」について、釈文を一部あらためるべきである。

(3) 資料収集と慧萼の活動地を確定するため、中国において調査を行った。その結果、主に以下のような成果が得られた。

①現在、京都国立博物館が所蔵する安祥寺出土の蟠龍石柱は、慧萼が唐からもたらした尊勝陀羅尼経幢の一部とされている。これに関し、841 年、もしくは 842 年に慧萼が唐で面会した斉安師の住寺浙江省海寧市安国寺跡に、慧萼と同時代の蟠龍の意匠を施した尊勝陀羅尼経幢が 3 基あることを確認し、これを調査した。

②蘇州において慧萼が立ち寄ったことが知られる唐代の武丘東寺が、地方志ならびに出土遺物によって、現蘇州市霊岩寺内の東側に比定できることを確認した。

③慧萼も利用したとみられる会昌の廃仏後の明州開元寺が、現寧波市街の南の五台庵に位置したことを特定できた。

④慧萼が利用したと思われる塩官から長江までの運河を確認できた。

⑤慧萼の依頼で「日本国首伝禅宗記」を彫ったと伝わる「蘇州開元寺沙門契元」は、中国史料では蘇州重玄(元)寺の「寺僧」、あるいは蘇州南禅院の「院僧」としてみられるが、開元寺とのかかわりが確認できない。しかし蘇州市などに遺る碑刻などによって、唐代、蘇州の開元寺と重元寺は、現在の報恩寺付近に近接して存在していたことが確認され、契元は両寺にかかわる僧か、あるいは「開元寺」は「重元寺」の誤りである可能性がある。

⑥浙江省普陀山の慧萼伝承に登場する「新羅礁」について、現在、観音観光案内地図等で紹介されている位置は誤りであり、現在の缸片礁がそれにあたることを確認できた。

⑦慧萼が訪れたとみられる泗州普光王寺については、その地点を特定するにはいたらなかったが、盱眙県から淮河を挟んで西側の沿河の田園地帯において、泗州古城の城壁の痕跡と思われる煉瓦片の散乱地帯を発見した。

(4) 史料集注釈の作成、研究論文の作成によって、主に以下の諸点を明らかにすることができた。

①841 年に最初の入唐が知られる慧萼の五臺山への入山ルートは、日本→山東半島→楚州→泗州普光王寺→澤州・潞州→雁門→五臺山ルートとして復元できる。

②『元亨釈書』が伝える、慧萼の訪れた杭州塩官霊池院は、『咸淳臨安志』巻 85 に「崇福寺、在県六十里、乾元元年建、旧名霊池、会昌五年廃、大中元年重建、祥符元年改今額」とあるのがこれにあたる可能性が高い。
③慧萼が、841 年から 1 年間という僅かな期間において、泗州普光王寺、五臺山、天台山、杭州塩官という広い範囲を精力的に巡礼できた背景には、在唐新羅人たちの協力があった。
④慧萼が唐から請来し、平安文化にも影響を与えたとされる『白氏文集』について、これが慧萼によって日本にもたらされたとする通説は誤りである。実際は、844 年、五臺山を目指し再渡唐した慧萼が、その途中、『白氏文集』を保管する蘇州南禅院の協力を得てこれを書写し、同年に唐から帰国した神侯男らに託して、日本にもたらされたものである。
⑤日本の太后橘嘉智子が慧萼を派遣し招聘した唐の禅僧義空は、程なくして戒律の乱れた日本仏教界への失望を深め、来日後 10 年も満たずして唐へ帰国してしまう。その後、慧萼が蘇州の契元に依頼し制作して日本にもたらした「日本国首伝禅宗記」碑には、達磨が転生して片岡の飢者となり聖徳太子の前に現れたが、その後日本で禅を伝える者が無かったこと、しかし橘嘉智子が恵蕚を派遣し義空を招聘して壇林寺に迎えたことで、禅を伝える環境が整ったことを喧伝する内容であったと推察される。
⑥浙江省普陀山観音信仰の慧萼に関する伝承は、同山の寺観が整備される 13 世紀に整えられ、それが『仏祖統紀』の慧萼伝承に反映されたとみられる。また、これが『元亨釈書』以後の日本史料の慧萼伝にも影響を与えている。この原伝に近いものは、『宝慶四明志』『延祐四明志』開元寺条の、唐の韋絢の史料をもとにした記事である。
⑦明州―普陀山の観音信仰の担い手は、明州開元寺や普陀山を拠点に、この海域に集う日本、唐・宋、新羅・高麗の人々であり、それぞれの主体性が、当地の観音信仰に多様性を与えていたとみられる。また、当地の観音信仰とかかわる伝承に、日本の慧萼や新羅の梵日、新羅賈人といった 9 世紀に活躍した日羅の人々が登場するのは、この時代に、明州が東アジア交易の拠点として急成長を遂げたことと深く関係している。
⑧慧萼の日唐往来は、史料上確実なものとしては、842 年帰国、844 年帰国、849 年帰国、852 年帰国、863 年帰国の５回を数える。これに可能性も含めるなら、857 年帰国と 859 年帰国を加え、計７回を数えることになる。これは、他の著名な入唐日本僧を圧倒する往来の回数である。

(5) 本研究によって明らかになった、慧萼の史的意義は、以下のとおりである。
①日本の王権・仏教界と唐仏教界とをつなぐ、東アジア仏教文化交流史上の意義。
②唐・新羅の交易者らとつながり日唐往来を繰り返した、東アジア交易史上の意義。
③平安文学に影響を与える『白氏文集』をもたらした、日本文学史上の意義。
④唐の石刻を日本へ紹介した、日本石刻文化史上の意義。

(6) 上記の研究成果を踏まえて、注釈付史料集・研究論文・文献目録からなる、総頁数 104 頁の報告書を作成し、内外の研究者・研究機関に配布した。これにより、東アジア史の貴重な研究資料・研究素材を広く共有するという当初の目的は達成され、慧萼に関する研究環境を大きく前進させることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）
①田中史生、最後の遣唐使と円仁の入唐求法、「遣唐使船再現プロジェクト」春日大社シンポジウム、2010 年 4 月 25 日、春日大社
②田中史生、入唐僧恵萼と白氏文集、鄭州大学外国語学院・浙江工商大学日本文化研究所主催 国際シンポジウム「東アジアにおける中原文化の受容と展開」、2009 年 8 月 29 日、中国鄭州大学
③田中史生、入唐僧恵萼からみた東アジア交流―遣唐使後の日唐交流―、浙江工商大学日本文化研究所主催、遣隋使・遣唐使 1400 周年記念国際シンポジウム、2007 年 9 月 15 日、浙江省杭州湾大酒店

〔図書〕（計 6 件）
①田中史生　他、光明日報出版社、東亜視域与遣隋唐使、2010、232～240
②田中史生　他、株式会社角川学芸出版、遣唐使船の時代-時空を駆けた超人たち、2010、190～210
③田中史生、筑摩書房、越境の古代史、2009、245
④鈴木靖民、高志書院、円仁とその時代、2009、265～281
⑤金健人、遼寧民族出版、中韓古代海上交流、2007、95～109
⑥古代の博多展実行委員会、福岡市博物館、古代の博多　鴻臚館とその時代、2007、140～143

〔その他〕
①田中史生、葛継勇、2007 年度～2010 年度

科学研究費補助金基盤研究（C）「入唐僧慧蕚の求法活動に関する基礎的研究」〔課題番号：19520581〕成果報告書『入唐僧恵蕚の求法活動に関する基礎的研究』、2011 年 3 月、104

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　史生（TANAKA FUMIO）

関東学院大学・経済学部・教授

研究者番号：50308318

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者

葛　継勇（GE　JIYONG）

中国鄭州大学・外国語学院・副教授

李　鎔賢（LEE YONG HYEON）

韓国国立中央博物館・学芸研究士

王　海燕（WANG HAIYAN）

中国浙江大学・人文学院歴史系・副教授